

## 漢字で教える

石井 ですから、私ども三歳や四歳の子どもに、たとえば「熱い」という字を教えるにしても、牛乳びんに熱いという字を張りつけて、それに熱湯をそそいで子どもたちにそういうものを触れさせる。つまり熱いという経験と、熱いという文字を結びつけるというように努力しているわけなんです。熱いという字によって、熱いという経験がそこでよみがえらなかつたならば、それはほんとうに読めたことにならない、つまり経験を、いうならば文字で整理するわけです。そしてまた経験というものを、いつでも文字によって代表させることができる。そうならなければ、ほんとうに漢字がものになったとは言えない。

吉田 そういう意味で、具体的な経験というのをおろそかにして、字ばかり教え込もうというのは、たいへん疑問なことであらうと、いまの教育全休の流れは、経験の地盤なしで字を教えようとす

る、概念を教えようとするですね。

石井 まったくの経験を無視した文字で、文字の生命を無視した、単に機械的にそれが書けるようになればいいというような、テストに書ければそれでいいというような、こういう漢字力であるならば、これはまったく無意味であると思うのです。

吉田 そういう点で、幼稚園に広まっていけばいくけど、お母さんや先生がたがへたに誤解をして、とにかく字をたくさん覚え込ませればいいというふうになりかねない情勢は世の中にありますね。

石井 ですから、「漢字を教えるはならん、漢字で教えよ」、これは簡単な言葉ですけども、これを私は幼稚園でやる先生にはひとつの合い言葉のようにしてもらっているんです。つまり「漢字を」というのと、「漢字で」という違いを先生に考えてもらう、こう思っているわけです。